平成18年度 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ
教育プログラム及び審査結果の概要

◇「1.申請分野(系)」～「6.履修ﾌﾟﾛｾｽの概念図」：大学からの計画調書（平成18年4月現在）を抜粋

機 関 名	京都大学	整理番号	d008
1．申請分野(系)	人社系		
2．教育プログラムの名称	臨地教育研究による実践的地域研究者の養成 （アジア・アフリカ地域研究教育におけるフィールドワークとインターンシップを活用した研究者養成コースの導入）		
3．関連研究分野(分科)	主なものを左から順番に記入（3つ以内） 地域研究		
（細目・キーワード）	主なものを左から順番に記入（5つ以内） （アフリカ（含アフリカ史）、東南アジア、西アジア、南アジア、地域協力）		
4．研究科・専攻名及び研究科長名 （[ ]書きで課程区分を記入、複数の専攻で申請する場合は、全ての研究科・専攻を記入）	（主たる研究科・専攻名） アジア・アフリカ地域研究研究科・ アフリカ地域研究専攻［博士課程（一貫制）］	研究科長（取組代表者）の氏名 平松 幸三	
	（その他関連する研究科・専攻名） アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア地域研究専攻［博士課程（一貫制）］		

5．本事業の全体像（わかりやすく、具体的に記入してください。）

5−(1) 本事業の大学全体としての位置付け（教育研究活動の充実を図るための支援・措置について）

京都大学は「地球社会の調和ある共存」を基本理念として、アジア・アフリカ地域との連携を重視した国際協力と社会貢献を教育研究の柱としてきた。なかでもフィールドワーク（臨地研究）という研究手法は本学の学問的特徴のひとつと位置づけられる。中教審等の報告にも、世界的な経済不安、環境問題、政治的対立等の現代的諸問題に対して人文社会科学の立場から分析・解決に向けて貢献し、国際機関等で活躍する専門家を養成することが急務であると指摘されている。本事業は、京都大学におけるアジア・アフリカ地域に関する教育研究資源の蓄積を活用し、今日的な問題意識のもとにカリキュラムに組み入れ、学生の主体的な研究活動を促し、地域研究の若手専門家の育成を目指すものである。本事業は本学の基本理念を具現するとともに、本研究科の中期計画にもあるように高度な専門能力を持ち、社会で主導的な役割をはたす若手地域研究者を育成するものと位置づけられる。

京都大学では本事業の円滑な推進のために、アジア・アフリカ地域における教育・研究・交流・広報の拠点として海外拠点の充実化、フィールドワークの計画及び実施の支援にあたる若手研究者の配置、インターン受入れ先となる国際機関・組織との大学レベルでの連携の強化を考えており、これらのために相応の予算措置を講じる予定である。また、学生のフィールドワーク旅費の一部を京都大学教育研究振興財団等を通して支援する計画である。

機 関 名	京都大学	整理番号	d008

5-(2) これまでの教育研究活動の状況（これまでの改善点と、今後の課題について）

本研究科は、博士課程5年一貫制のもとでフィールドワークを重視しつつ、以下の取組みを通して、アジア・アフリカ地域に関する総合的地域研究にかかわる教育研究を推進してきた。

(1)**複数指導教員制**：専門分野・地域の異なる3人の指導教員群による集団的・学際的指導体制のもとで、学生の主体性を尊重しつつ、個性・資質を伸ばす総合的な学習支援を行ってきた。

(2)**体系的カリキュラム**：地域研究の概念や基本的問題群について学ぶ「地域研究論」、地域研究の方法論を修得する「共通演習」、調査の成果をまとめるための「研究演習」、論文作成を具体的に支援する「課題研究」などを組み合わせることによって、課題探究能力・問題解決能力を育成する研究指導体制の推進につとめてきた。

(3)**フィールドワークに関する指導の重視**：調査計画の立案からフィールド・ステーション等を活用した臨地教育（オン・サイト・エデュケーション）、そして帰国後の成果のまとめに至るまで、きめ細かな個人指導を行ってきた。

(4)**5年一貫制の活用と課題研究単位による段階的見きわめ**：5年の課程を二段階に分け、前半は地域研究の概念や文理融合的、総合的地域研究のアプローチに対する理解と方法論を修得させ、フィールドワークの結果を論文にまとめる能力の養成に努めてきた。前半終了時には博士予備論文の提出を求め、公聴会と審査を行っている。後半は演習等を中心とし、フィールドワークの成果を博士論文としてまとめる過程の支援に重点をおいてきた。こうした論文作成の指導過程を課題研究Ⅰ～Ⅳの単位認定と連動させることによって博士号取得に至るまでの指導過程を段階的に進めてきた。

5-(3) 魅力ある大学院教育への取組・計画（5-(2)を踏まえた大学院教育の実質化（教育の課程の組織的展開の強化）のための具体的な教育取組、発展的展開のための計画、及びこの取組によって改善が期待される点について）

地域研究の若手研究者を養成する教育課程をさらに強化するために、従来の教育プログラムに加えて、実践的地域研究者の養成コースを設ける。課程前半のフィールドワークを(1)**問題発見型臨地研究**と性格づけ、(2)**臨地教育**を効果的に実施するとともに、課程後半に新たに**実践的臨地教育プログラム**として(3)**インターンシップ**を導入した魅力型新教育プログラムを実施する。3要素の相互の連携と接合をはかるために、フィールドワーク支援室、臨地教育推進室、インターンシップ支援室を設け、それらに特任教員および専任教員を配置し、研究科全体として組織的支援体制を確立する。

(1)**フィールドワーク支援室**：課程前半の学生に対して、従来型のフィールドワークにおいて重視してきた生態・社会・文化に根ざした地域の固有性の理解だけでなく、地域が直面する現代的諸問題を研究課題として「発見」するための積極的な支援を行う。あわせて危機管理や臨地研究に必要な調査許可や査証の取得等に関する情報提供を行う。

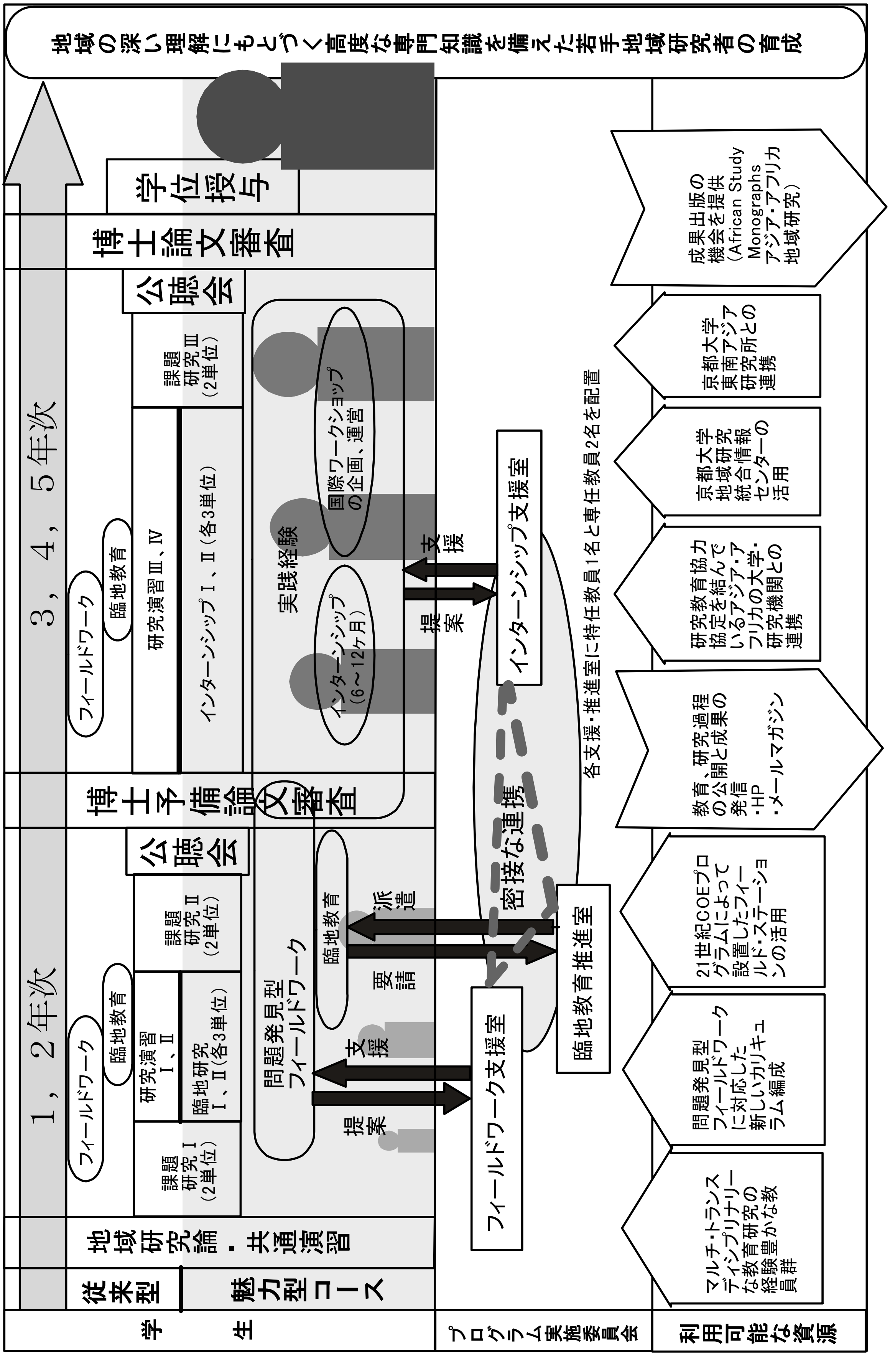
(2)**臨地教育推進室**：問題発見型のフィールドワークを円滑に進めるために、臨地教育にたずさわる教員の派遣を推進する。フィールド・ステーションや衛星通信を活用するとともに、適切な専門分野の経験をもつ教員を早い段階で現場に派遣し、発見された研究課題に関する適切な調査の方法論を修得させる。

(3)**インターンシップ支援室**：課程後半の学生に対して、フィールドワークの過程で発見した具体的課題に関する総合的理解をさらに深め、地域の実情に即した実践的対処策を起案したり、研究成果を公表したりする能力を高めるため、国際協力や開発援助にかかわる研究機関・実施組織や国際NGOなどにおいて半年から1年間程度のインターンシップを実施させる。また、インターンシップを問題発見型フィールドワークの延長線上に位置づけ、フィールドワーク支援室とインターンシップ支援室が指導教員群と連携して問題解決・提言型の課題設定を奨励する。

3つの支援・推進室は緊密な連携のもと、地域研究教育の成果を実践に応用する可能性を拓くものとして本教育プログラムの実施過程を公開しその発展的展開をはかる。

機 関 名	京都大学	整理番号	d008

6．履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）



機 関 名	京都大学	整理番号	d008

＜審査結果の概要及び採択理由＞

「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化（教育の課程の組織的な展開の強化）を推進することを目的としています。

本事業の趣旨に照らし、

①大学院教育の実質化のための具体的な教育取組の方策が確立又は今後展開されることが期待できるものとなっているか

②意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画となっているか

の2つの視点に基づき審査を行った結果、当該教育プログラムに係る所見は、大学院教育の実質化のための各項目の方策が非常に優れており、十分期待できるとともに、教育プログラムが事業の趣旨に適合しており、その実現性、一定の成果と今後の展開の面も期待できると判断され、採択となりました。

なお、特に優れた点、改善を要する点等については、以下の点があげられます。

〔特に優れた点、改善を要する点等〕

・問題発見型フィールドワークと実践型インターンシップを教育プログラムの中に制度化し、それを支援する教職員の体制も整備されている優れた取組である。これまでの研究教育業績、特にフィールドステーションの活用は本取組に極めて有効である。

・実際に全ての学生がこれを実行するとは限らないので、学生と教育プログラムとのミスマッチに留意する必要があり、その対策を工夫する必要がある。